

第 174 回「ラッセルを読む会」レジメ

日 時： 平成 22 年 5 月 15 日 (土) 15:00～18:00

テキスト： In Praise of Idleness, 1935 (『怠惰への讃歌』)：第 3 章 建築と社会問題

第 6 章 前門の虎、後門の狼

[本書の執筆・出版時期] (1929 年世界大恐慌)

- ・本書が出版された 1935 年(昭和 10 年)は、第二次世界大戦に向かう暗い時代(日本も昭和不況)
- ・邦訳書は 1958 年(昭和 33 年)出版

第 3 章 建築と社会問題

□建築の 2 つの目的

- (1)実利的(実用的)目的： 雨露をしのぐため／暮らすため(一般住居)
- (2)政治的目的： ある観念を植え付けるため(神殿、王宮、支配者の屋敷など)

□中世社会では、社会組織が古代より一層複雑であったにもかかわらず、芸術的動機から建築しようとすることは、昔と同様少なかった。

例えば国王の城郭：当初は、武力を主眼として設計されており、芸術的動機はあまりなかった。

□中世紀において最上の建物を生んだ母胎は、教会と商業であった。

①教会の大伽藍： 神及び神に仕える司教(bishop)の栄光を示していた。

教会は、大伽藍だけでなく、寺院、修道院、大学なども建てた。(これらは、特定の形式をした共産主義に基づいたものであり、・・・、こういう建物の内部をみると、個人的なものはすべてスパルタ的で簡素であるが、公共的なものはすべて立派でひろびろとしている。)

②商業施設： 衣料会館(フランダース)、市場施設・・・

→ 商業上の建築物を完成したのは、近代財閥の発祥地であるイタリアだった。／ヴェニス(ヴェネツィア)は、共和総督の宮殿や豪商の邸宅に、荘厳な美の新しい型を創造した。

□ルネッサンスが北方にひろがるにつれて、フランスやイギリスの粗野な貴族は、イタリアの富豪(メディチ家など)の豪華さを身につけようと努力し始めた。・・・しかしそうして確保した貴族らしさは、フランス革命で滅びた。

□19 世紀の建物には 2 つの基本形式があり、そのどちらも機械的生産と民主主義的な個人主義に基づいている。

- 1)「煙突の聳えている工場」と「労働者階級が住むマッチ箱のような家屋」
- 2)「共同生活・社会生活の場(事務所、工場)」と「個人生活(含む家族生活)の場」

・ヨーロッパにおける個人主義の発達とその住居への表れ／政治や経済の領域外だとみなすあらゆる事柄において、ますます個人主義的になっていった。

□専業主婦にとっての家

- ・専業主婦にとって家庭は欲求のはけ口

- ・異性の多分に危険な人たちと出会う機会がほとんどないことを、夫は妻を所有し、妻は夫を所有するという考えから、各々喜んでいる。
- 以上のことは、結婚した女性が家庭外で働いて生活の糧を得ることが通常のものとなれば、変わっていく。

□社会で働く女性が必要なもの

- ・賃金労働者階級の家は、結婚していて職業を持っている女性にとって過労に陥りやすいつくりになっている。 → 適切な様式の建物が与えられるならば、女性たちは家事や育児の仕事の大部分を免れることができる。
- 1)共同炊事を行う台所(自分たちが食事の心配をしなくて済ませてくれるサービスの区画)
- 2)勤務中、子供の世話をしてくれる育児学校・保育施設

□再建築の必要性

- ・賃金労働者の妻の仕事は、無報酬であるため、一つも現代化されないできた。
- 増改築 or 建て直しが必要)

古い建物の子供への害悪

- ・学齢期前の子供は、日光や新鮮な空気や運動がとばしい環境にいる。
- ・親(大人)と同じ食事をすることになりやすい。
- ・親とばかりいつも一緒にいるのはよくない。(子供は同年代の子供と遊びたい。)

古い建物の母親への害悪

- ・一日中子供の世話(母親は朝と夜だけであれば、子供に対していい顔でいられるが・・・)
- ・専業主婦は、保母、料理人、女中の3役をこなさなければならない。しかもいずれにおいても専門家ではない。
- ・母親がくつろぐ場所・スペースがない。

↓ 以上の問題を解決するためには、

○建物に公共的要素を取り入れる必要がある。 共同の台所、ひろびろした食堂、娯楽施設・・・

□育児学校・保育施設

- 1)大人と同じものでない、子供のための安くて栄養価のある食事
- 2)広い場所での運動
- 3)他の、同世代子供たちとの交流(母親は一日中子供の世話をしていなくてよいので、子供と一緒にいる朝と夜、子供に十分な愛情を注げる。)

□ロバート・オーウェンの四辺形型の共同体

- ・ニュー・ラナーク

□しかし、建築上の改革にとって最も頑強なさまたげとなるものは、賃金労働者の心に宿るもの。

→ どんなにけんかをしても、貧しくても、自分たちだけの「家庭生活」を好む。

□失業問題と女性の就職

- ・既婚女性の就職の難しさ(職場を奪うということで妨害にあう)

第6章 前門の虎、後門の狼

(原著タイトル Scylla and Charybis)

当時の支配的な思想 共産主義かファシズム

独、イタリア、日本のファシズム

ロシアの共産主義

A. 共産主義に反対する理由 (共産主義者=第三インターナショナルの理論を奉ずる人)

(1) マルクスの哲学に同意できないこと

×レーニンの唯物論や経験批判論 ×歴史の変遷に弁証法的必然があるという考え方

(2) マルクスの剰余価値説は承認できない。

(3) いかなる人間であっても間違いがないと考えるのは危険

(4) 共産主義は民主的でない

×プロレタリア独裁

・共産主義革命後の支配階級が常に一般のためなるように働くと考えることは馬鹿げた理想論
(マルクス主義政治心理学にもそむいている。)

(5) 共産主義は、ファシズムを除く、いかなる組織よりも自由(特に私的自由)を制限する

→ ビック・ブラザー

(6) マルクスや共産主義思想には、筋肉労働者を不当に賛美する傾向がある(頭脳労働者を敵に回している)

(7) 階級闘争

(8) マルクスや共産主義における憎悪心

B. ファシズムに反対する理由

ファシズムについては、目的も手段も反対(共産主義については、手段は反対だが目的はだいたいにおいて賛成)

(1) ファシズムの特徴 反民主的、国家主義的、資本主義的

(2) ファシズムに対して心から反対する点は、それが人類の一部分(特定の国家、特定の階級、特定の個人)を選んでそれだけが重要なものだとし、それ以外の者は、選ばれた者のためにつくすように、力によって強制される。(最大多数の最大幸福を政治家の正しい原理として認めていない)

(3) ファシズムは感情的な反抗である。

・ファシズムはその支持者が望むことを実現できないという意味で不合理

C. 共産主義とファシズムの両方にあてはまる反対論

(1) 両方とも、小数のものが全住民をあらかじめ考えておいた型に力づくでしてようとする試み。

(2) 両方とも、全体としての社会の姿を胸にえがいて、人々をその型にあてはめるためにねじまげる。